

ウスメバルを育む清らかな里海づくり事業

蛸集幼魚調査 (要約)

高橋 進吾

目 的

ウスメバルの生残へ大きな影響を与えると考えられる流れ藻から藻場、藻場から海底への移行期において、魚礁が持つウスメバル幼魚の育成効果を検討するため、蛸集状況や生物的特徴等の調査を行う。

材料と方法

1. ウスメバル釣獲調査

平成21年6月、7月に風合瀬沖において、風合瀬漁協所属の漁船1隻を用船し水深別(50m層、80m層、100m層、120m層)に釣獲調査(漁法:一本釣)を行った。釣獲後に、尾叉長、体重、性別、生殖腺重量等の精密測定を行った。

2. 魚礁蛸集状況調査

平成21年7月、水深50m前後に設置された風合瀬沖人工魚礁(平成3~5年度設置)周辺海域において、試験船「青鵬丸」に搭載された計量魚探EK-500(シムラッド社製)を用いて、約2km四方の範囲を概ね5ノット前後で南北に航行させ魚類の蛸集状況を観測した。また、魚探反応のあった魚種を確認するための釣獲調査も行った。

結果と考察

1. ウスメバル釣獲調査

平成21年6月、7月の釣獲調査では、ウスメバルが各々96尾、79尾釣獲され、盛漁期ともなっている春頃に多い傾向にあった。水深別尾叉長組成をみると、尾叉長21cm以上(4歳魚)の成魚の大部分は水深80m以深で釣獲され、尾叉長21cm未満(2~3歳魚)の幼魚は主に水深50m層で釣獲された。

2. 魚礁蛸集状況調査

平成21年7月の計量魚探調査では、人工魚礁付近の底層で小規模な魚群反応が5ヶ所みられた。魚種確認の釣獲調査ではウスメバルが17尾釣獲され、その大部分が幼魚であったことから、底層での小規模な魚群反応はウスメバル幼魚が主体と考えられた。